

シンポジウム 「お伽草子と説話」

趣旨

16世紀を軸に展開した短編の物語草子類＝お伽草子（室町物語）は、これまで素材面において説話集・軍記物語の所載話、唱導書、寺社縁起、芸能（能・狂言・幸若舞曲・延年風流）等が、また民間伝承（＝民間説話）が引き合わされてきた。さらにテキストの多くに絵巻や奈良絵本があり、ビジュアル・リタラシイたる面をもっている。

かかるお伽草子を、あらためて説話文学史の点からいかが意義づけるか。言い換えると、説話文学はお伽草子と響きあってはいかなる達成をみたか。そのアプローチは新たに文体、翻訳翻案などからを探るべきである。

あわせて、このたびは欧米の近年の研究状況も取り上げて、お伽草子の文化史的意義を考えていきたい。

基調講演

「お伽草子の説話 / 説話のお伽草子」

徳田 和夫（学習院女子大学）

パネリスト要旨

「玉藻前と犬追物起源譚—故実とお伽草子—」

伊藤 慎吾（国際日本文化研究センター）

中世以来、流鏑馬や笠懸と並んで騎射の修練として尊ばれた武術に犬追物がある。神功皇后の出兵の故事や玉藻前退治の故事がその起源として説かれている。この二つを別々に捉えるものもあれば、結び付けて捉えるものもある。いずれにしても、両説話は中世から近世にかけて並行して起源として引用されてきた。そのうち、玉藻前退治譚は、それ自体が物語草子化され、『玉藻の草紙』というお伽草子として十五世紀には成立し、読まれてきた。その一方で、同時期には玉藻退治の異聞も散見され、この説話伝承が一樣ではなかったことが窺われる。そこで、本発表では、玉藻前退治譚の諸相を見ることで、中世におけるお伽草子と説話の関わりを考えていきたい。

「お伽草子『二十四孝』と渋川清右衛門の女訓書」

ケラー・キンブロー（コロラド大学ボルダー校）

享保年間、つまり享保14年（1729）までに、大阪の書肆である渋川清右衛門（柏原屋清右衛門）は箱入りの中世小説23作品を『御伽文庫』と題し、「女中に見給ひ益ある本」と宣伝して版行した。当該23作品中には室町末期から『二十四孝』で知られる郭

居敬の『全相二十四孝詩選』（14世紀初期）の和訳がある。ほぼ同じ頃、元禄11年～享保14年の間に渋川は少なくとも6種の女訓書を出し、そのうちの3書にも『二十四孝』の絵入り説話を加えた。今発表では渋川のお伽草子『二十四孝』を『女用文章綱目』（元禄11年）、『女童子往来』（正徳5年）、『女大学宝箱』（享保1年）の3作品に照らし合わせて考察する。そのプロセスで、渋川にとって『二十四孝』の女性に対する教えは何か、という単純だが悩ましい質問に答えてみたい。

『平家物語』の女性説話とお伽草子・能・民間伝承―

ロベルタ・ストリップリ（ニューヨーク州立ビンガムトン大学）

十五年ほど祇王・祇女の伝承地を尋ね歩き、一書にまとめた。実在の人物として語っていくところに、物語としての達成があらわになっている。現在はさらに二位尼の伝説地を調査している。分析には武家物語における女性説話との対照が必要になってくる。

「つなぐ霞―物語表象から―」

山本 陽子（明星大学）

室町から江戸にかけての絵巻において、特異な発達を遂げたのが霞の表現である。もちろんそれ以前の絵巻にも半透明の霞は描かれ、夜や遠山の实景として、あるいは場面をさりげなく分割する手段として用いられてきた。

しかし室町時代に入ると、輪郭のはっきりして不透明なすやり霞と呼ばれる形状となって棚引く。ここに物語という架空世界を演出し、特定の場面に注目させる新たな役割が加わることで、江戸時代の奈良絵本・絵巻では、さらに画面の上下に金泥や金砂子まで蒔いた、装飾的な霞が描かれるようになることが指摘されている。

このような霞の表現の発達と、これらの絵巻や絵本の主題となったお伽草子の持つ性質との関係性を考えてみたい。すなわちこれらの霞は、異国や異界との往来、恋愛ものや説話、出家物や本地物のように多様なジャンルが結びついて成立した物語を、挿絵においても視覚的な違和感がないようにつなぐ効果を持つものではないだろうか。

【懇親会】18:00～ 学習院女子大学 互敬会館 2F 戸山ラウンジ

【個人コレクション展示】学習院女子大学 2号館 1F 文化交流ギャラリー

*9月23日（日）には同会場で、名古屋大学頭脳循環プロジェクト〈絵巻・絵本研究〉が開催されます。